ぱられる。

時田蒔木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ぱられる。

【Ｎコード】
Ｎ１８５５Ｑ

【作者名】
時田蒔木

【あらすじ】
異世界パラレルワールドです。
主人公（出雲　幸）が不思議な鏡のせいで、異世界に迷い込んで自分と同じ顔のやつにあったり、男に間違われたり、帰る方法を探したりする……話。

はじまり。

ねぇ、おばあちゃん？
なあに？さっちゃん。
僕ね、自分のこと「僕」って呼ぶことにしたんだ。
どうして？
あのね、ハルキがいつまでたっても自分のこと「ハル」って言うんだ。そしたらね、ハルキのママがね、直しなさいって怒ってたの。だから、ハルキよりも年上のサチがお手本にね、ならないといけないって、だから、僕のこと「僕」って呼ぶことにしたの。

微かなエンジン音と車体の揺れに身を委ねながら、窓の外をぼんやりと眺めた。
クリスマスが近いからか、街はネオンがきらめき、空はますます、深く暗い色をしていた。
今日は、従兄弟の晴紀の買い物に、随分と付き合ったからか、足の裏がジンジンと痛んだ。当の晴紀は、ニコニコしながら買い物袋の中身をしきりに気にしていた。
『仲町台、仲町台です。次、お降りの方は、バスが完全に止まってから席をお立ちくださるようお願いします。』
機械的な女の声が車内に響いた。斜め前に座っているお婆さんが、ボタンを押すのが見える。
「晴紀」僕は、晴紀の肩を叩く。「次だよ」
「あぁ、うん。いくらかな？」

「見えるかぎり、２８０円。」
僕たちは、準備しておいた二人分のお金をすばやく支払って、バスを降りた。
「あ…雪だ。」
晴紀は、はぁーっと息を吐き出し、呟いた。
「道理で寒い訳だよ……」
温暖化と言われているわりに、僕らの住んでいる地方は、例年以上の寒さだった。
二人で肩を並べながら、急いで祖母の家への道を歩いた。頭や肩に、雪が降り積もり、体の芯まで冷えてしまった。
今日は、晴紀の家に久々に泊まって行くことになっていた。晴紀は母の姉の子供で、晴紀たち一家は、祖母と同居していた。僕はというと中学生になってから、年に一回顔を出すだけになっていた。僕の家は、祖母の家から車で1時間足らずなのだが、その近さが反って、僕の足を遠退かせていた。
歩いて5分程で祖母の家に着いた。たてつけの悪い戸を、晴紀が慣れた様にニ・三度押し、ガラガラと音をたてながら戸が開いた。
「ただいまー」と晴紀が言う。
奥から、バタバタと音がして祖母が顔を出した。
「おかえりなさい。寒かったでしょう？早く中に入んなさい」
「ばーちゃん、雪が降ってきてさー、寒いのなんのって」
「おじゃまします」と僕が言う。
晴紀と僕はさっさと家の中に入ると、コタツに入り、体を温めた。台所の方から、晴紀の母が顔をだした。
「幸ちゃん、久しぶり。大きくなったわねー」
と叔母さんが、決まり文句を言った。ちなみに、僕の身長は高校生になる前から変わっていない。叔母さんの世間話が始まりそうになったところで晴紀が声をだした。
「母さん、腹減った」
はいはい、と不満そうに言いながら、叔母さんは台所へ戻って行

った。その後ろ姿を眺めながら、僕は口を開いた。
「晴紀、早く物置に行こうよ」
そもそも、僕が晴紀の家（つまり祖母の家）に泊まりに来たのには訳があった。
一週間前、晴紀が物置にサッカーボールを取りに行ったとき、何かが光ってガタガタという物音を聞いたらしいのだ。
物置の中を見渡したが何も変わったところはなく、その時は気にならなかったのだが、また別の日に物置に入った時、物置の中の配置が変わっていることに気が付いた。目の前に、金の縁取りの鏡が立てかけてあったのだ。
不思議に思って、そのことを家族に話したが、誰も物置には入っていないと言うし、気味が悪いから一緒に物置の中を探索してくれ、と頼まれたからだった。
晴紀は「まあまあ、落ち着いて」という感じのジェスチャーをして、言った。
「うちの物置、電気ついてないし、明日の午前中に行けばいいじゃん。」
「だってさぁ、僕は明日朝早くに帰っちゃうし……」
「えっ、そうなの？聞いてないよ！？」
「うん、言ってないし。」
「ひどいよ！明日も遊びに行けると思ってたのにさぁー！」
「そんなこと言われたって、明日の午後は用事あるし。……それに、ひどいって、晴紀だって嘘ついてるじゃん。」
晴紀はその言葉に、ビクリと体を震わせた。
「嘘って、なんで？」
僕はふっと息をはいて、頬ずえをついた。
「……物置の話は本当だとしても、一人じゃ怖いってキャラじゃないでしょ。それに、本当に気味が悪いって思ってるなら、物置の件を後にして遊びに行ったりしないって。」
晴紀はイタズラがばれた子供の様に、バツのわるい顔をしていた。

無言の晴紀を眺め、別に怒ってる訳じゃないのになぁ、と思いながら、自分よりも年下の、自分よりも大きな体の少年のうなだれた姿を見ていた。
前にもこんなことがあったような気がする。
「嘘だって分かってて来たんだから怒ってないよ。とりあえず、物置の話は本当だよね？」
晴紀は首を縦に振った。
「懐中電灯でも持って行ってみよう。体もあったまったし。」
「分かった。懐中電灯探してくるよ」
晴紀は頷いて、母親の消えて行った台所の方へと小走りに向かっていった。
僕はただ待っているのも時間の無駄だろうと、祖母の部屋に向かった。祖母の部屋は2階だったのだが、最近は登るのがつらいだろうということで、一階の日当たりのいい部屋へ移動していた。
「おばあちゃん、入るよ？」
と言って、戸を開けた。
おばあちゃんは、毛糸で何かを編んでいる最中だったようで、僕を見ると少し驚いた顔をした。
「幸ちゃん、何？どうかした？」
「晴紀が物置で見たって言う鏡っていつからあるの？」
「鏡ってどんな？」
おばあちゃんはキョトンとした顔で言った。あいつ話してないのか、と少し苛立った。
「懐中電灯あったよ」
と当の本人は戸口からヒョイと顔を出し、無邪気に笑っていた。
僕はふーっと息を吐いた。
僕はなんだかんだで、晴紀の笑顔に弱い。
「じゃあ、鏡持ってもう一回来るね」
と祖母に声をかけると、祖母はまたキョトンとした顔をしていた。

物置は家の裏手にあり、夏になると雑草がひどく生えているため、入るのが困難な込み入ったところに位置していた。今が夏でなくて本当によかったと感じながら、懐中電灯で足元を照らし、進んで行く。

先を歩く晴紀は、鼻歌まじりに物置の鍵をいじっている。

本当に何をやるにも楽しそうだなぁ、と思っているとすぐに物置にたどり着いた。

物置の南京錠を外し、戸を力を入れて開けた。懐中電灯で中を照らすと、確かに真っ正面に鏡が置いてあった。

（この鏡……？）

奇妙な感覚に戸惑い、物置の出入口で立ちすくんでいると

「どうかした？幸、入んないの？」と晴紀は僕の顔を覗き込んだ。

「あぁ、鏡を家の中に持っていこう。ここじゃ寒いし、見ずらいし、ばあちゃんが何か知ってるかも知れないしね。」

晴紀はすぐに同意を示し、鏡を取りに中に入った。

鏡は思ったほど大きくなく、僕の手の中にすっぽりと入るぐらいの大きさだった。

晴紀は鏡を持ち上げると、さっさと僕のもとに戻ってきて僕に鏡を差し出した。

「物置の戸、しめるから持ってて。」

奇妙な感覚は消えることはなかったけれど、晴紀にこの感覚をうまく伝えることができるかわからなくて、奇妙な感覚を抱えながら、僕は鏡を受け取った。

受け取ってみると、なんてこともなくただの無機質なひんやりと冷たいものが、僕の手の中におさまった。

「どうかしたの？幸？早く戻ろうよ。」

僕が呆けていると、晴紀は不思議そうに僕を見ていた。

「な、なんでもない。行こうか」

無理に笑顔をつくり、家に向けて足を進めた。

「おばあちゃん、入るよ？」
すっと、戸を開くとおばあちゃんの編み物はもう終わっていた。
「おばあちゃん？」
ちょっと待って、とおばあちゃんはジェスチャーをした。そして、さっと空色のマフラーを僕に差し出した。
「これ、幸ちゃんに作ったのよ。」
「え…ありがとう！うれしいよ。」
マフラーを受け取ると、ほんのりと温かさを感じた。手作りマフラーなんて初めて貰った。素早く、首に巻きつける。
「どうかな？」とその場でくるりと回って聞く。「似合う？」
「えぇ、流石おばあちゃんの孫だわ！やっぱり、この色にして正解だったわねぇ。」
そう言って、おばあちゃんはふふっと笑った。
「ね、晴ちゃん似あってるわよね？」
「へぁ？う…うん。似あってる、よ。」
なんとなく歯切れの悪い晴紀に疑問は感じたけれど、それよりも、今手の中にある鏡がきになって仕方がなかった。
「おばあちゃん、さっき言ってた鏡のことなんだけど、これ知ってる？」
おばあちゃんは僕の持っていた鏡に目を止めると、驚きに目を見開いた。
「ばーちゃん？どうかしたの？」
「おばあちゃん、この鏡に何かあるの？」
僕は奇妙な違和感がなくならない鏡に目を落とした。その時に、鏡に何か文字が彫られているのに気がついた。
「鏡に文字が」
「幸、見ちゃだめ！見ないで！！」
おばあちゃんの悲痛な声が聞こえた。

「ばーちゃん！？幸、文字って」
晴紀の驚く声が聞こえた。
僕の目は文字にくぎ付けになった。鏡が僕の手に吸いつくように、手から離れなかった。異国の地の言葉が、暗号のような文字が、僕に読めるはずはないのに、頭の中に言葉の意味が伝わってくる。
『この鏡を持つにふさわしい血を持つ者よ。お前を受け入れよう――』
鏡が光ったかと思うと、足元から光が迫ってきた。
「な、何？どうなって」
「幸ちゃん！鏡を手放しなさい！」
「だって、離れない！離れないよっ！」
「幸！」
晴紀が僕に向かって手を伸ばした。
「晴紀！」
僕も必死に晴紀に向かって、手を伸ばしたけれど、光に阻まれて、届きはしなかった。
「幸！」「幸ちゃん！」と晴紀とおばあちゃんが声を上げたのを最後に目の前が真っ白な世界に覆われた。

目を開くと真っ先に目に入ったのが、きらびやかな明りだった。
「しゃ、しゃんでりあ？？」
「第一声がそれ？」
ふふっと、少年は僕の横で笑った。
少年といっても、きっと僕と同じくらいの年齢だと思う。
「いや、だっ誰？ここどこ？だって」
さっきまで、僕はおばあちゃんの家にいたはずで、晴紀もそばに

いて……いったい何が何だかさっぱりわからなかった。自分がなんで上質なソファーの上に寝ているのか、そしてなんで知らない少年がそばにいて笑ってるのか、本当にさっぱりだった。
「わー、混乱してますね。大丈夫ですか？」
いや、大丈夫ではない。
僕はニコニコ笑う少年を、混乱する頭でじっと眺めた。
少したれた目に、栗色のショートカット、１５０？ほどの身長。
どうしてだろう……僕はこの顔をいつも見ている気がする。
気がするのではない！確実に毎日見ている！
「お前、どうしてっ！？」
「さぁ～？どうしてなんだろうね。僕も驚いちゃいましたよー。」
でも、タイミング的にはいいかな！神様は僕に味方してるのかも～。と、またニコニコと笑った。
なんで毎日見てるかって、僕と顔がそっくりだったからだ。
いや、似ているというレベルではない。まったく同じなのだ。
「そういえば、あなた名前は？僕はレイ。よろしく」
「出雲（いずも）　幸（さち）だけど……」
なんで、こいつはこんなに落ち着いてるんだろ？
差し出された手をなんとなく握り返したけど、奇妙な気持ちでいっぱいだった。
「サチねー。悪いんだけど、僕の代わりしてくれません？」
「代わり？？なんの！？というか、僕帰りたいんだけど！」
会ったばかりの人間になに頼んでるんだ、この男は。
「大丈夫、大丈夫。サチ、僕と同じ顔だしさ。それに……」
「それに？」
レイはヘラヘラ笑いながら、とんでもないことを口にした。
「サチは帰れないと思うよ～。」
「はぁ！？何言っちゃってんの？帰れないって、どうしてっ？」
「悪いけどー、説明してる暇ないから。ごめんね～」
全然、悪いとおもってる顔じゃない。

レイはさっきと変わらないヘラヘラした顔をしている。
「とりあえず僕の洋服着て、僕のフリしてこの部屋にいてくれればいいから～。時間かせぎ、見たいなー？」
「ちょ、ちょっと待って！僕やるとは……」
じゃ、頼んだね～っとレイはヘラヘラ笑うと、窓から颯爽（さっそう）と飛び降りてどこかに行ってしまった。
「えっ！？おい！！レイー！？」
え？本当に行っちゃうわけ？？
え？僕どーすればいいわけ？？

「はー。どうしろって言うのかな。」
レイがいなくなって、仕方なく置いていかれた洋服を着ることにした。
何にもわかることがなくて、レイが言ってたことに乗るしかなかったからだ。
そうだ。レイがいなくなったんだから、レイ以外の人に聞くしかないじゃないか！ここがどこなのか、帰る方法が本当にないのか……
この部屋にいろって言われたけど、この部屋はげんなりするほどゴテゴテした部屋だった。テレビで見た、どっかの王室みたいな金ぴかの鏡とか、大きな扉とか、１０畳ほどある部屋とか。
レイはいったいどんな地位のやつなんだろ。
でも僕は今レイのことなんかより、なんでこんなところに来てしまったのか、どうしたら帰れるのか考えないといけない。僕には絶対帰らなきゃいけない理由がある。だから、絶対に帰る方法を見つけなきゃ。
「あれ？鏡はどこに行ったんだろ？」
ここに来た直接の原因は、おそらくあの鏡だ。
おばあちゃんは何か知ってるみたいだったけど、今はそのおばあちゃんに会える方法がないのだから、原因も分からない。

「なんか、考えるの面倒になってきた……」
とりあえず、寝よう――――。
寝たら、何かいい案が思い浮かぶかも知れないし。
キングサイズのベッドに勢いよく寝転がると、自分が思っている以上に疲れていたみたいで、すぐに睡魔が襲ってきた。

「おい、起きろよ。レイ！」
「んー？誰？」
「あぁ？誰って寝ぼけてんのか？ラズだっての。昔っから朝弱いよな！」
ハッと僕が目を覚ますと、見知らぬ顔が目の前にあった。
「あー。熟睡してた！えっと、ラズだっけ？僕、レイじゃないよ。」
「はぁ？」
ラズという、僕よりも身長も年も上の男はじっと僕を見つめた。
「こんな締りのない顔、お前以外に誰がいるんだよ？」
「ここにいるでしょ。」
「いや、だから、お前はレイだろ？お前が生まれたころから、俺はお前を知ってるんだぞ。俺が見間違えるはずないだろ？」
現に見間違えてるけどね。
「なんて、説明したら分かってくれるのかな……。」
「まったく、とにかく起きろよ。お前の父上殿がお呼びだぞ。」
「はぁ。」
僕はあいまいな返事をして、起き上った。
「着替え出してやるよ。さっさと着替えろ。父上殿は遅れるとうるさいぞー」
「父上殿って誰の？」
「だから、お前のだって。ほれ、着替え。」
「あぁ、レイの。……どうも。」

着替えを受け取って着替えようとした時、ふと気がつくと、ラズがこちらをじっと見ているのに気がついた。
「いや、何見てんの？君。」
「は？別にお前の裸なんて見慣れてんだからいいだろここにいても。」
「全然よくないんだけど。」
「今日のお前、どことなく変だよな。語尾がのびてないし、ヘラヘラした顔もしてないし、着替え見られるの恥ずかしがってるみたいだし。」
「だって、別人だからね。」
わざわざレイのために、レイの振りなんかする意味も義理もないのだから、ここにいるラズとか言う奴にばれても怒られたりはしないだろう。
「本当に大丈夫か？熱でもあるんじゃないのか？」
「ないよ。とりあえず、着替えるから出てってくれるかな。」
僕はおでこに、のせていたラズの手を払って言った。
「なんだよ、心配してんのにー」
ラズは拗ねたように、不満そうに、口を尖らせた。
「本当に別人だって言うなら、証拠を見せろよ」
うーん、証拠ね。
「レイって男だよね？」
「お前、自分の性別も分かんないのか？本当にやばいな。」

「じゃあ、僕は女だからレイじゃないよ」

「…は？お前、頭おかしくなったのか？」
「いや、本当のことだし。」
「いやいやいやいやいや、待て！じゃあ、お前は誰？」
「僕はサチだよ。レイなら昨日の夜にそこの窓から飛び出してった」

「なっ！？」
ラズは僕の指差した窓に飛びついた。
「ここは３階だぞ！？そんなことが……でも、レイならやりかねないっつーか。でも、ここにいるのが本物ってことも……」
「僕が本物じゃない証拠をどうしても確かめたいんなら、女の子をこの部屋に呼んでよ。」
「なんで？」
ラズは心底不思議そうに、僕を見た。
「なんでって、僕は女なんだから確かめられるなら、女の子の方がいいに決まってるじゃん。それとも、ラズは僕の体に触りたいの？」
いや、そんな訳じゃないけどとかなんとか口の中でモゴモゴと文句を並べている。
ラズはなんとなく納得してないような感じに顔を歪ませた。
「とにかく誰か呼んでくるから、着替えて待ってろ」
「うん。ほかに行くとこもないしね。」
僕は、ラズがこの部屋から出て行くのを見守ると、さっさと着換えにかかった。
考えることはたくさんあるけど、情報がさっぱりないのだ。もしかしたら、この部屋にも何かしらこの国？世界？のことについて書いてあるものがあるかもしれないけれど、そんな本を読んでる暇は僕にはなかったし、ここの文字が僕に読めるとも限らなかった。こういうときは、長年ＲＰＧで鍛えた知識により、長老に会いに行くのがベストだ。国王とか魔術師とか、とりあえず、なんか僕の世界を知ってそうな人に話を聞くのが一番手っ取り早いに決まってる！
そういえば、レイは僕のことについて何か知ってるみたいだったな。
ということは、レイの父上殿とかいう人は何か知ってるかも！
さっさと着替えて、その父上殿とかに引き合わせてもらおう。ついでに、朝飯ももらおう。昨日の晩から何も食べてないし、お腹が

減って力が出ないって感じだ（ｂｙ　アンパンマン）。

一時間くらい経つとノックの音がした。

「おい、侍女連れてきたぞ。」

ラズが返事を待たずに戸をあけた。随分と遅かったな、なんて思ってラズの顔を見ると、一時間前に顔を見た時よりもすごくやつれた顔をしていて何も言えなかった。

「あぁ、じゃあ、どうぞ」と僕が言って両手を広げた。「えっと、侍女さん？お願いします。」

「え、あの、その」

侍女さんはなぜか顔を赤らめた。

「あぁ、そりゃ、急に知らない奴の体触れって言われても迷惑か……。ごめんね？」

「いえ、そんな、光栄に存じます！！」

首が取れるんじゃないかというくらいに、首を左右に振りまくっていた。

ていうか、光栄って……

「し、しつれいします！」

声が完璧に裏返った侍女さんはためらいなく、僕の胸に飛び込んできた。

そして、しっかりと背中に手をまわし僕のことを力任せに抱きしめた。

「え？え！？」

「はぁ――――！？」

僕とラズは驚きに声をあげた。だって、これではハグされてるだけで、男か女かなんてわかりそうもなかったからだ。というか、苦しいんだけど！

「うえっ！？えっと、侍女さん？僕のこと分かった？」

「えぇ、分かっておりますわ。身分差の恋というものをしてみた

いと前におっしゃっておりました、レイ様のことですもの！ご自分が女であるとおっしゃって、侍女と接触し恋に落ちてみたかったのでしょう！？私にお任せください。立派にあなた様と恋に落ちさせていただきますわ！！」

「は！？お前、マジかよ、レイ！！どーりで、侍女を選ぶときにみんな志願してきたわけだ……」

それで、侍女を呼んでくるときに手間がかかったのか！とか、そんなこと考えてる場合じゃない！！

「ちーがぁーう！！僕は本当に女だって！ね、侍女さん僕の胸触ってみてよ！君と同じものついてるから！ちゃんとあるから！レイじゃないからぁ～！って僕はなんでこんなこと言わなきゃなんないんだ！」

泣きたいまじで。女が女と恋に落ちたいわけあるかぁ！レイがふざけたこと侍女さんに言ってるからこんな目に！

「そんな恥ずかしがらずに！レイ様ぁ～！」

しがみついて、ずっと騒いでいた侍女が僕の胸の上に手を載せた瞬間、無言になった。

「れ、れいさま？こっこっこの胸についてる脂肪はっ！？」

「だからー、女だって言ってるじゃん」

疲労困憊ぎみに僕は言った。もみくちゃにされてせっかく着た服がしわになってしまった。

「い、いやぁあああああー！！」

と叫び声をあげて、侍女は後ろに倒れた。

「あー、伸びてる……。」

ラズはいまだに信じられないというように、僕のほうを見た。

「まじかよ……レイのやつ、俺に何も言わずに行ったのか」

ラズは切なそうに呟いた。それだけで、ラズとレイの関係が伺える。

それほど仲が良かったはずなのに、どうしてレイはラズに何も言わないで出て行ったのか……

それは僕に分かるはずのない疑問だった。
僕だって大切だからこそ、言えないことっていうものがあるのは分かっていたから。
「つまり僕はレイじゃないってわけ。分かってくれた？とりあえず、ちょっと父上殿に会わせてくれよ。聞きたいこともあるしね」
ちょっとした放心状態だったラズは、はいはいと言う感じに返事をした。
「父上殿ね……父上殿っ！？やべっ、忘れてた！遅れるとやばいんだよ！とりあえず、レイが消えたことも報告しなきゃならねーんだったな……で、名前なんだっけ？」
ラズは僕の方を指差して、聞いてきた。
「出雲　幸って言うんだ。サチって呼んでよ」
「サチか。まぁ、急ぐぞ！」
「え？」
ラズは僕の手を乱暴に引っ張り、走り出した。
「そーいえば、レイってどんな奴？父上殿は偉い人？」
「レイは何も言ってかなかったのかっ！？」
「……聞こうとしたら、窓から飛び降りた」
ラズはどことなく遠い目をしていた。
「ま、まぁ、後で教えてやるよ！後でな！」
確かに走りながらの会話は疲れる。僕とラズは無言になって走りつづけた。
５分から１０分ほど走りつづけると、これまた先程のレイの部屋の扉の５倍はあろうかという、銀の扉があった。
「うわっ、でかいなぁ」
「時間は……３０分遅刻かぁ……はぁー」
ラズは気合いを入れるように、ぱちぱちと顔を両手で叩くと、扉に手をかけた。
外の扉を見ても、中を見てもキラキラした内装なのには驚きを通り越して、呆れかえってしまった。金や銀、ド派手な色をあしらっ

た部屋をみて、この部屋の主の神経を疑った。
その部屋の、真ん中にある椅子に座っているはずの存在がいないらしく、ラズはキョロキョロと辺りを見渡していた。僕もラズの真似をして、目をせわしなく動かした。
「父上殿ってどこにいんの？ここにいるはずだったの？」
「あぁ。……どこ行ったんだろーな」
そう言い、ラズは部屋の中を探索しだした。机の下、花瓶の中、柱のかげ、椅子の後ろ、カーテンの裏……。正直、本気で捜すつもりがあるのか僕には判断できなかった。
しらぬ間に、ラズは手にねこじゃらしのようなものをもって、おおよそ、大の大人が隠れられそうもないところを率先して捜していた。
仕方なく、ラズにならい、部屋の中をうろつく。
そこで、何故かこの部屋の調度に似つかわしくない、小さな木箱が目に入った。
なんとなく気になってその箱に近づいてみた。
「う、うわぁ！」
「どうした！？」
とラズがすぐに駆けつけてきた。
小さな木箱が急に開き、中から小さな毛むくじゃらの何かが、僕に飛びかかってきたのだ。
「ね、ねこぉ！？？」
「ドラシール様！！」
……様？何言ってるんだラズは？そんなことを考える間もなく、驚きに目を見張った。
「息子よ！そなたが来ぬ３０分もの間、余は身が張り裂けるような思いであったぞ！父の愛らしい姿を見、うわぁ！などと叫び声をあげ、あまつさえ、余をねこなどと、ネコなどとッ！！父は悲しい、悲しいぞ！！」
自分のことを父だといい、サチの腹の上でネコが泣きだした。

「ね、ねこがしゃべってる！ラズ！ネコがしゃべってるよ！？」
「落ちつけ！！それはレイの父親だ！」
ラズが信じられない一言を言い、僕は開いた口がふさがらないといった感じに、口を開いたまま固まってしまった。
「……え？これが？」
「そう、それがだ！」
「レイの父上殿！？だって猫が父親なんておかしいじゃん！」
ねこじゃん！ねこじゃん！と騒ぎ出す僕にネコが僕の腹をよじ登りつつ言った。
「おい、待て！これとかそれとか、余を誰だと心得ておるのだ！？
それに、レイ！父のどこが気にくわぬのだ！？昔からお前は余のネコ姿がお気に入りであったのに、なぜ急に、父と他人のフリなどしておるのだ？泣くぞ！父は泣いてしまうぞ！？」
もう泣いてるじゃん、という突っ込みをよそに、ネコの手（足？）が、僕の胸にかかった。
その瞬間にネコが僕の身体から飛び退り、２本足で立ちながら、体を震わせた。
「れ、れれれれい？お前いつの間におんなになったのだ？？」
レレレのおじさんか！と突っ込みたくなったが、その辺は置いておいて、
「僕なら生まれた時から女だけど？」
と、至極当然のことを言ってみた。
「何を言ってっ…！余は、お前が生まれたときのことを覚えておるし、あそこにだってちゃんと」
「うわわわわっ！ストップ！ストップです！ドラシール様！」
「なんだ、ラズ！？息子の性転換の事実を知って、驚かぬ親がいようか！？いや、おるまい！私は一国の王であるまえに、一人の男、父親だぞ？これが落ち着いておれるか！」
『だから、レイじゃないって』
と僕とラズは異口同音に言った。

「な、なにをいう！？このような、しまりのない顔この世に二つもあるかぁ！！」
「あるでしょ？今ここに。」
まったく、ラズにしても、このネコ……もとい、この父親も、人の顔に難癖をつけるとはなんと失礼なやつらなんだ。
「確かに、性転換もあり得ない話ではないかもしれませんが、どことなく、雰囲気も違うし、それに、レイが女になる必要もないんですよ。ドラシール様もわかっているでしょ？」
「……あぁ、確かに、あやつはとことん女好きだからな……女になるはずがないな……」
「え？レイって女好きなの？」
同じ顔で女好きってなんか嫌だな。と思っていると、
「こ、こほん。すまなかったな、取り乱すような真似をして。」
とドラシールがあやまってきた。「まぁ、別にいいですけど。」と答えた。似てる僕も悪いしね。
「しかし、ここまで似ていると、奇妙というか……
そんなことより！どうして、レイ似の娘がここにいて、レイはいないのだ！？は！ま、まさか……」
いや、そんなことで片づけるなよ。
「そのまさかです。逃げられました。」
「どうしてそれを先に言わん！国中に包囲網を敷け！」
「一応、もう動いてもらってますが、見つけるのは困難でしょうね。あいつ、昔から隠れるの得意ですもん。」
「そんな、だったら、どうするのだ！？もうすぐ儀式があるというのに！」
「あ、あのぅ……」
訳のわからない話を進めるのはやめてほしい。
というか、僕はここがどこだかもわからない状態だ。帰れないと言ったレイの言葉も気になるし、ここはドラシールに話を聞くのが一番手っ取り早そうだ。なんてったってこの国の王様みたいだし。

ネコが王様っていうのもどうよとか、ネコが父親っておかしくね？とか、じゃあ、レイって王子なのか？とか、いろいろ思うけど、そんなもの後回しだ！とにかくさっさと晴紀のところに帰りたい。
「僕は…」
と口を開きかけたところで、ぎュルルルという奇怪な音がした。
「今のって……ぷっ」
ラズは大声を上げて笑い出した。
「お、お前、今の腹の音かぁ！絶対、ぜったい変だろー」
「だって！僕昨日の昼過ぎから何も食べてないし、お腹すいて当然だし！」
「おぉ、そうか。朝食を用意させよう。ネコの姿では、しまりがないか……」
というと、ドラシールの体が光に包まれた。手や足がのび、みるみるうちに人の姿に変わっていった。
「ちょっ！？ドラシール様っ！」
とラズが焦ったように、自分のコートでドラシールの体を覆った。
「前、隠して！まえっ！」
「あぁ、そうか。服のことを忘れてた」
忘れてたって……この人、羞恥心ってものないのか？とこの国の王をみて思ったが、もう何も言うまいと決めた。こっちの人の考えてることは、さっぱり分からん。
ラズはサチの様子を見て、少し呆れた顔をしていた。
（こいつ、男の裸見せられそうになって、焦りもしないのかよ……）
まぁ、どこから来たのかも知らない女だし、レイの生き写しなだけで、すでに存在ごと奇妙な奴なんだから、考えてることなんてさっぱり分かんねぇな。
と、ラズは失礼なことばかり考えていた。僕も人のことは言えないけどね。ラズがそんなことを思っているとは、思いもしなかった。
「ラズ。誰かに余の部屋に服を持ってくるように伝えろ。ついで

に、ここに三人分の朝食もな。」
「はい、かしこまりました。」
「余は、ちと自室に行く。少しの間、ここで待っておれ。」
「はぁ、分かりました。」
と、僕が答えると二人とも部屋を後にした。
だだっ広い部屋に一人になると、ほっとするような、寂しいような心地になった。
部屋の壁に地図のようなものがあって、僕はずっとそれが気になっていた。自分が今いるところがいったいどんなところなのか、少し興味があった。それに、もしかしたら家に帰るのに役立つ何かが分かるかもしれない。
近づいて眺めると、僕のよく知っている世界地図とまったく一緒だった。
いきなり知らないところに来てしまったし、変な人ばっかだし、ネコがしゃべるしで、異世界だと決め付けていたけれど、ここは僕の知っている世界なのかな？
じっと地図を睨み付けるように見ていると、色々と文字が書いてあるらしいことが認識できた。でも、なぜその記号が文字だと分かったのかは、分からないままだった。文字は読めないはずなのに、何故か地図の中の文字がわかった。文字が言葉を伴って、僕の頭の中に直接飛び込んでくるような錯覚を覚えた。あの鏡をもったときの感覚に似ている。
そういえば、何故か言葉は最初から通じていた。文字を書くのは流石に無理かもしれないが、本から情報を得ることも可能なようだ。実際、本を読む時間なんてないと思っていたけれど、こうして時間に余裕があるときは本を読んで知識を深めるのも悪くないかもしれない。
「よし！そうしよう！」
「何が、そうしよう！なのですの？」
後ろから急に声をかけられて、びっくりしてしまい、「うわぁ！」

と叫び声をあげた。
少し、困惑気味の女の声がした。鈴のなるような声って言うのかな？
「何をそんなに驚いてますの？あなたらしくないですわ、レイ様」
誰のせいだよ！？と言おうと、振り返ると、軽くウェーブがかった翡翠色の髪を、心配そうに揺らしながら、彼女は僕の顔を不安気に覗き込んだ。幼い表情から、彼女が僕よりも年下だろうということはわかった。
それにしても、
「すごく、髪が綺麗だね。かわいいよ」
と思わず、彼女の髪を撫でた。
僕が微笑むと、彼女は急にドギマギしだした。
「あ、あの、その……」
蚊の鳴くような声で、「ありがとうございます」とつぶやいた。
「あれ？エリーゼじゃん。」
気付くとラズが、部屋に入ってきたところだった。
「エリーゼ？」
「あぁ、レイの婚約者」
「……はぁ、婚約者……」
「先程から、何をこそこそと話しておりますの？」
「なんでもねーよ！なっレイ？」
とラズは僕に肩を組んできた。
「は？僕はレイじゃ」
「いいから、話を合わせろ！」
ラズはこそこそと僕に耳打ちをした。
「レイ様もラズも今日は少し変ですわ？どうかなさいまして？」
「どこもおかしくねぇって！俺達、これから朝食なんだよ。エリーゼは？」
「もう、とっくに頂きましたわ。まだ食べていらっしゃらなかったの？」

「ま、まぁな！ドラシール様とこれから摂ることになってるんだ。なぁ、レイ？」
「う、うん。そうなんだ」
「まぁ……では後で、レイ様のお部屋に参りますわ。よろしくて？」
「え？何か話あるの？」
「いえ、あの……お話がないと側にいるのは……迷惑、ですの？」
エリーゼがうつむき、少し悲しそうに目を潤ませた。
「そんなことないよ！……ただ、これから、父上とお話があるんだ。いつ終わるか分からないから、エリーゼを待たせるのは僕には気が引けるよ。」
「そうだな、エリーゼまた今度にしな。」
「そうですの……」
明らかにがっかりした様子の美少女の姿に、何となく悪いことをしているような、罪悪感に見舞われた。
「えっと、話が終わったら、僕がエリーゼのところに行くっていうのは、だめ？」
一瞬にして表情が変わり、嬉しそうにほほ笑んだ。女の自分から見ても、すこぶるかわいい！
「よろしいんですの！？」
「うん。もちろん！だって、こんなにかわいい子のお誘いは断れないよ」
エリーゼは顔を真っ赤にしてうろたえた。自分でも少し臭いセリフだなって後から思ったけど、正直な気持ちだから、しょうがない。
ラズは僕を見て、またあきれたような、驚いたような表情を浮かべている。
「で、では、お待ち申し上げておりますわ、レイ様。」
と言い残すと、さっさと部屋を出て行ってしまった。
「……お前、微妙にレイに似てるな。」
「は？顔は似てるって最初からわかってるじゃん。」

「いや、そういうんじゃなくて、女ったらしのとこが。」
「はぁ？なにいってんの？僕は思ったことを言ってただけだって。」
「……あぁ、そう……」
なんか、機嫌が悪そうだ。はっ！もしかして……
「ラズ、エリーゼが好きなの？」
「はぁ！？んなわけねぇよ！」
「だって、機嫌悪いし、嫉妬じゃないの？」
「ちげぇよ！」
「なんだ～、つまんないのー」
「どんな期待をしとるんだ、お前は。」
はぁーとラズがため息をついたのと、ドアがノックされたのは同時だった。
「お食事をお持ちしました。」
「あぁ、そこに並べておいてくれ。ドラシール様も、そろそろお戻りになるだろう。」
給仕の人が手際良く、食事を並べるのを何となく眺めた。すごく、洗礼された動きだ。ゆっくり動いているように見えて、軽やかに食事が並べられていく。
すべての食事が並べられ、給仕の人と入れ替わりにドラシールが部屋にやってきた。
「さて、食事にするか。」
そう言われ、円卓の上座にドラシールが、その右にラズが座り、僕が左の席につき、やっと話ができる環境になった。
「とりあえず、どうして息子の部屋にいたのか教えてもらおうか？」
「ごはん食べていいですか！？」
「お前はどこから来たんだ？」
と三人が同時に言った。
二人は先程から、腹の虫ならぬ腹の悲鳴がなりやまない僕を見か

ねて、まずは朝食をとらせてくれた。これがめちゃくちゃ美味くて、まさしく頬がとろけそうだった。実際にとろけたことはないけどね。
朝食を食べ終えて、コーヒーを飲み干すと、待ってましたとばかりにドラシールが質問を投げかけてきた。
「お前はどこの誰で、どうしてレイの部屋にいたのだ？どうやってこの城の中に入ったんだ？」
「えーと……僕の名前は出雲幸で、年は１６歳。どうやってここに来たのかは僕にも分からない。」
「わからない？」
「うん、わかんない。金の鏡を持ったら、鏡から光がでてきて、気が付いたらレイの部屋にいたって感じ。」
あの時、自分が身につけていたものといえば、携帯とおばあちゃんがくれたマフラーのみだ。その二つと洋服は、レイの部屋にあるたんすにしまってきた。携帯は圏外じゃなかったけど、呼び出し音ばかり鳴って繋がりそうになかった。
「光ねぇ……」
ラズが考え込むように俯いた。
「そういえば、レイが何か知ってるみたいだったんだよ！」
「レイが！？」
「うん。まぁ、僕のおばあちゃんも何か知ってるみたいだったけど。それで、国の最高権力者とか長老とかに聞けばなにかわかるかと思ってさ。この場合、猫の父上殿に聞くのが１番早いかなって」
「レイが何かを知っておったというのか？なんと言っておったのだ？」
「うーんと、もう帰れないとか、グッドタイミング的なことも言ってたかも……」
ドラシールは表情を変えず、（というか、基本顔にでない。）意味をかみしめるようにしていた。
「……で、お主はどこから参ったのだ？」
「日本の山形県だけど。」

「ニホンのヤマガタケン？どこだ？」
ラズは首を傾げながら、話を聞いている。やっぱり、地名を言ってもわからないようだ。うーん、どう説明したら分かってもらえるんだろう？
「サチ、レイがどこに行くか言っていたりしなかったか？」
「さぁ？とりあえず、レイのふりしてって頼まれただけで、すぐに窓から飛び降りちゃったし。」
「まったく、あのバカ息子めッ！儀式はどうするのだ！？」
ドラシールはダンッと拳をテーブルにたたき付けた。
「そういえば、儀式って？」
「知らないのか？まぁ、レイとドラシール様を知らないのだから、儀式も知らなくて当然か……」とラズは勝手に納得し、説明をしてくれた。「今、この土地では竜が人を襲うということが多発している。竜の怒りを止める方法は今のところ分かっていないが、この国の臣下は馬鹿げたことにレイが王族に加わったせいだと騒ぎ立てた。」
ラズは苦渋に表情を歪めた。本当に我慢ならないことを、認めたくないことを無理に飲み込んだような顔だった。ドラシールはどこか悲しそうな顔をしてはいるが、口を出す気がないのか黙ってラズと僕の会話を聞いている。
「王族に加わった？どういう意味？」
「レイはドラシール様の本妻の子ではないんだ。そして、王位を継ぐ予定でもなかったし、王族に加わっていたのではなく、まぁ、何て言うんだ？居候のような存在だったんだ。しかし、本妻の一人息子が流行り病で亡くなってレイに王位が巡ってきた。そうしたら、途端に竜が人を襲うようになったんだ。」
「今まで竜は人を襲わなかったの？」
「あぁ、そうそうあることじゃなかった。だから、レイが王になるのが神の気に障ったのだと囁かれるようになってしまった。」
「神の気に？どうして？」

「この地方では、竜は神の化身だと言い伝えられているんだ。」
まず、竜がいるのに驚きだけど、あんまり突っ込んで聞くと話が横道にそれてしまう。竜がどんな生き物なのかはあとで質問しておこうと僕は思った。言い伝えは宗教みたいなものなんだろうということが推測できた。
「で、儀式って？」
「儀式というのは、神の怒りを沈めに行くというものだ。神がお怒りなのは、レイの血筋が竜族の者と一切混じっていないためと考えられている。」
「竜族？人間じゃないの？何かの種族？」
「……竜族っていうのは、その名の通り竜の血が入った種で、髪が金髪の者だ。たまに先祖がえりで羽が生えたり、強い魔力を持つ者がいたりするらしい。」
羽？魔力？空が飛べたり、魔法が使えたりするのかな？
「そして、儀式というのは竜族の子どもを……」
「子どもを？」
ラズは目を伏せ、軽く息を吐き出した。
「子どもを殺して、食うんだ。」
「食うって、食べるの！？」
ラズは目を伏せたまま、話さなくなった。代わりにドラシールが口を開く。
「仕方ないのだ。子どもを食い、レイの血肉にすることが叶えば、レイは王位を継ぐことができる。」
「でもっ！そんなっ……そんなのって」
「あぁ、人道的に間違っている。しかし、それをしなければ、レイは認められない。今、レイ以外に王に相応しい者がいないのだ。」
「相応しい者？」
ドラシールは頷いて話しを続けた。
「王に選ばれる者には体に徴が必要なのだ。」
「しるし？」

「《聖なる石》と呼ばれるもので、右手の甲に石が埋まっているのだ。色は人によって違うが、レイの石はブルーだったな。」
「……形は？」
「形？形も人によって違うが、レイの石はひし形だった。ちなみに余の石は黄色の円形だ。」
と手袋を外して見せた。僕は驚きに声がでなかった。石が手に埋まっているからじゃない。同じだからだ。口の中が渇いて声を出しずらかった。
「……僕にも、ある。」
「あるって……まさか！？」
僕は右の手の甲にかかる布をとってみせた。ひし形のエメラルドグリーンの石が姿をあらわす。三人は声もなく、ただただサチの手を見つめていた。
「僕の生まれた時からついていたもので、医者が取るようにすすめてきたんだけど、おばあちゃんが……」
そうか、おばあちゃんはこのことを知っていたのかと、妙に納得した。
「おばあちゃんが生まれたばかりの子供の手に傷をつけるのはよくないって、取らなかったんだ。」
「取る！？これは神の啓示だぞ？お前、なんて罰当たりなんだ！！」
「僕の住んでるところではそうだったの！」
「しかしこれは……サチとやら、お主、その徴は他の者には見せるでないぞ。」
「なんで？」
「それと、悪いが少しの間レイのふりをしてもらう。」
「えっ！なんで？」
ドラシールは暗い表情で、言葉を選ぶようにゆっくりと話した。
「余はレイを次の王にしたいと考えている。しかし、レイがこの城にいないことがばれたら、あらぬうわさが立つことになるであろ

う。」
「あらぬうわさって？」
「レイは王になる気はない。それどころか、儀式から逃げ出した、とな。」
「まぁ、逃げ出したくなる儀式だからね……。でもさ、レイが本当に王になりたくなくて逃げ出したんだったらどうするの？」
「それはないな。」
と、ラズが声を出した。
「レイは本当に王になりたくないなら、逃げるんじゃなくちゃんと役割を終えてからこの場を去ることを選択するはずだ。あいつの性格からするとな。」
「とにかく、レイの代わりを頼むには主しかいない。頼む。」
ドラシールが頭を下げた。長い髪がさらりと揺れた。
「でも、僕代わりなんて」
「主、帰る方法とやらが分からぬのであろう？ここなら、国の情報が集まっているし、余も知っていることはそなたに教えるとしよう。」
「うぇ？つまり、交換条件ってこと？」
「いや、交換条件ではない。主は断ることはできまい。」
「はあ？」言ってる意味が分かんないんだけど、と言う前にドラシールが続けていった。
「主が断るのは不可能だと言ったのだ。主が断るのであれば、この城に勝手に入ったことを罰する。牢に閉じ込め、最後は公開処刑を行うことになるであろうな。」
「しょ、しょけい？」
ドラシールは今まで変えなかった表情を、にやりと人が悪そうな表情に変えた。いや、実際悪いのかもしれない。
「そうだ。帰れないのであれば、家が必要であろう？レイのふりをしていれば、三食食事つき、屋根のある広いベッドで寝れるのだぞ？主は感謝しこそすれ、断るなどと言う恩知らずな行動はしない

はずであろう？なぁ、サチ？」
「うっ……は、はぃ。」
僕は小さくなってうなずくくらいしかできなかった。だって、ドラシールの言うとおりだったからだ。
ここを追い出されたら、僕に行く場所はないし、殺されたら帰るどころの話じゃないし。
僕は、レイのふりをして、どことも知れない場所で暮らすことになってしまった。
こんな調子で帰れるのかなぁー……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1855q/

ぱられる。

2011年10月8日00時34分発行